

## 同じように、という前提

今朝、わたしたちに与えられている聖書の御言葉には「妻と夫」という小見出しがついています。妻と夫は家庭という人間社会の最小単位を築きます。あらゆるものはここから生じると言っても良い家庭の根底となる礎に、神のしもべであるペテロが語ることは先程読んだ通りですが、ここで語られたことは21世紀の日本に生きるわたしたちにはもう時代遅れの、耳にする価値もない教えでしょうか。「妻たちよ、自分の夫に従いなさい、夫たちよ、妻を自分より弱いものとわきまえて生活を共にし、命の恵みを共に受け継ぐ者として尊敬しなさい」と勧められています。妻と夫、家庭の問題は家族の問題でもあり、今日のさまざまな問題をはらんだ家族関係を歴史を辿って全体的に考察する時間はありませんし、またそういう場でもないと思えますので、ここでは家庭の宗教的基盤として、またそこに遣わされたキリスト者の倫理的な基盤として何が語られているか、なぜそのように生きるのか、ペテロの手紙から、御言葉の指し示すところに心を添わせたく願っています。

と言いつつ、まず旧約聖書にさかのぼりたいのですが、先週10月30日の礼拝のなかで十戒が交読されました。いつもは詩篇の交読をしておりますが、第5週がある月には十戒を読もうという話をゆずり牧師としております。先週の説教者はゆずり牧師でしたが、礼拝の招きの言葉から、交読箇所、説教の聖書箇所から讃美歌まで、それぞれ説教をする者がすべて準備をします。おまかせをしているのは司会者の祈りと奏楽者による前奏後奏ですね。礼拝は、司会・奏楽・説教者・会衆と全体があわさってひとつの神さまへのささげものになります。奏楽者の前奏に導かれて講壇に上がるときに音楽からインスピレーションを受けるときもありますし、司会者の祈りに慰めを与えられて、押し出されるようにして講壇に立たされ

ます。先週まで、わたしたちは二部礼拝を守っていました。それでわたしは9時と10時半と二回、十戒を聞いたのです。ゆずり牧師が司会をしたときは前文と第一戒までを読んだので、会衆は偶数の戒めを朗読しました。第二礼拝の司会者は前文を読み、次を会衆に委ねましたので、会衆は奇数の戒めを朗読しました。わたしは両方の礼拝に出たので結局全部を朗読したことになります。あらためてみなさんの声で十戒が交読されるのを聴いて、それがとても良かったのです。神の戒め、民の応答、本来そのように用いられる流れのなかで、このところ続けて読んでいるペテロの手紙の教え、「神のしもべとして生きよ」と勧められる教えがすっと自分のなかに入ってくる感じがありました。今日与えられている家庭訓、家庭の中での教え、召使いと主人、夫と妻などの関係に、ずっと光が差し込んだようでした。大きな言葉で語ってしまうと、神の啓示ということなのですが、あらためて十戒の存在が大きいというか、いや、ここから発想しなければダメなのだということを、先週、みなさんが起立して声を揃えて十戒を交読しているのを聴き、知らされたのです。今週の木曜日、愛知東地区婦人研修会で講演をすることになっています。「主の恵みのご支配を生きる―旧約聖書の信仰から―」という主題です。これを決めたのはわたくしですが、豊橋教会婦人会からのリクエストは旧約聖書の話が聴きたいということでした。それで近場で、旧約の話させると横山だろうということで、白羽の矢がたった。その準備をされていて、教会と旧約聖書との関係をずっと考えていたのです。それで去年買って書庫に入れておいた「ナチ時代に旧約聖書を読む」という本があったことを思い出しました。本の扉には「反ユダヤ主義を公然と掲げ、旧約聖書を排斥しようとしたナチス時代に、キリスト教会における旧約聖書の重大性と新約聖書との内的関係の必然性を学問的に一貫して主張した旧約聖書学者フォン・ラートの珠玉の講演集」と紹介がありました。こ

れが読み始めたら止まらないくらい面白かったのですが、そのなかで十戒についてふれた文章にこうありました。十戒は人間に向かって叫ばれた大いなる神の主権に関わっていること、神さまはこの主権を、わたしたちの個人個人の生活の領域に展開されるというのですね。主権というのは、簡単にいうと神さまが支配されるということです。人間が思い思いにその存在を広げてゆこうとする場面に、自分勝手に支配しようと思っているところに神の主権が入り込んでくる。公の場で、法律が問題とされる場面で、市場で、経済生活で、しかも家庭のなかでも、私的な所有関係でも、性的な生活にまでも入り込んでくるのです。「あなたには、わたしをおいて他に神があってはならない」、この宣言が、わたしたちの生活のすべての領域を覆っているというわけです。そしてこの十戒の意義をこの旧約学者は独特の表現を用いて「神の戒めの中に、また人間生活が神によって差し押さえられているということの中に、神の救いの意志、特別な神の恩寵を学び取ることが重要」だと語るのです。このわたしたちの生活が神様によって「差し押さえられている」という表現に、ああそうだ、うまいことを言う。これこそ、十戒であり、神さまの恵みのご支配なのだと深く頷かされたのです。差し押さえというのは税金などを滞納して強制的に公権力などによって自分のプライベートな所有物を接収される、取り上げられることですが、それほどの強さをもって、神さまがわたしたちの生活の全領域に関わって下さるということ。そこに人間の戒め、制度として作り上げたルールに先んじて、大いなる神の主権という非常に強い言葉を用いて、わたしたちの生き方そのものが神のものとされているという出発点を持っていること。これこそがキリスト者の倫理的生活の根本だと申し上げたい。今朝、わたしたちに与えられている聖書箇所、妻と夫という教えも、わたしたちが生きている現場に、この神の手が伸びているということから読み解かなければなりません。神の主権、神の支

配から逃れている場はどこにもない、しかもそれがキリスト・イエスの十字架と復活の御業によって神の恵みのご支配に変えられている。これが大前提です。実際に、神はわたしたちのために独り子を送られ、十字架にかけられてまで、わたしたちを愛されること、贖い取られることを示されております。それをわたしたちはしばしば意識の外に置いてしまう。人間の生活が、交わりが、命が育っていくもっとも基本的な場所で、キリストを隅の親石とし、神を仰ぐことがなかったならば長い目でみたらそれは大変な損失でしょう。結婚したときに、複数の方から同じ言葉の入ったプレートを贈られました。以前、ゆずり牧師が説教のなかで紹介したこともありましたが、「キリストはこの家のかしら、食事のたびに見えざる客としておられ、わたしたちの会話に耳を傾けておられる」という言葉が英語で記されたものです。わたしたちの生活のすべてが神に差し押さえられているという、ちょっと意表をつかれる表現をもう少し丁寧に言い換えるとういうことかなと思いますね。家庭という、わたしたちが素のまま振る舞おうとする場で、内と外という意識の垣根によって、神さますらも意識のそとに追いやりがちな場において、そうではない。そこに、あなたの食卓に主が見えず、語らず、第三のゲストとして立ち会っておられることとして心に留めて振る舞うべきだと教えられます。さて、そういうことを念頭において、今日よみました聖書箇所ですが、3章1節「同じように、妻たちよ、自分の夫に従いなさい」と勧められます。今日の説教題は「同じように、という前提」としました。そうです、この「同じように、～従いなさい」という勧めが通奏低音なのです。わたしたちの服従の土台です。それはこの前の箇所に述べられています。22節以下「この方は罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪

を担って下さいました。わたしたちが罪に対して死んで、義に生きるようになるためです」。同じように、あなたがたも～と続いていく。このキリスト・イエスの執り成しのご生涯の上に、キリスト者は王の系統をひく聖なる祭司として召されているというこのイメージを繰り返しペテロは語ります。わたしたちの生き方のロールモデルとして、わたしたちの役割の上に、キリストの生きざまを重ねてゆくことによってキリスト者としての妻、キリスト者としての夫、キリスト者としての労働者、キリスト者としての経営者などなど、すべての属性の下にある隅の頭石、存在の土台としてキリスト・イエスの上に立つこと。それは自分の外に立つこと。神の働きに委ねて生きることを教えるのです。それは今日に当てはめるならば、自己実現と自己責任の連鎖の外に立つことです。奴隷が主人に仕えることにおいても、離散した寄留者の人びとが上に立つ統治者に従うようにいわれることにおいても、すべての服従の基本の下書きに、キリストがわたしたちに自由に仕えてくださったことを置いておくことが基本の構造になっています。この同じ前提に立って夫も妻も互いに仕えることが求められています。そして、キリスト・イエスの服従は十字架の死に至るまで神に従順であったと言われるように、ご自身の存在をわたしたちのために徹底的に傾けてくださったことを思います。漢字の遊びみたいですが徹底的というのは「底に」「徹する」と書く訳で、言葉通りの意味で、わたしたちの存在がまるごとキリスト・イエスによって下から支えられている。どん底にキリストがおられるのです。そして十字架と復活という罪の赦しと死の克服、新しい命の道によって守って下さっている。これこそがペテロが語る朽ちることも萎むことも汚れることもないイキイキとした希望なのです。そして、地上の権威は皇帝も、奴隷の主人も、そして家父長としての夫も、すべて神の秩序を表すために作り出された借り物の権威でしかない。その範囲において「主のために、人間の立てた制度に従いなさ

い」と勧められるのですし、仮に地上の権威が暴虐であったとしても「善を行って、愚かな者たちの無知な発言を封じることこそ、神の御心なのです」という心構えに行きつくのです。これらの教えが相手を自分の足元に服従させ、ほしいままに振る舞うための方便として利用されてはならないことは当時においてもそうでしたし、今日においてはなおさらそうであります。

夫たちへとペテロが語る勧めのなかに二度「共に」という表現があることに注意を払わなければなりません。当時は共同体の責任者として今よりもはるかに家父長としての男性の役割が重かった。その責任のひとつとして「妻を自分よりも弱い者とわきまえて生活を共にし」とここで一回、そしてさらに次の文章でも「命の恵みを共に受け継ぐ者として尊敬しなさい」と言われるのです。夫婦は生活共同体です。そしてそれは命の恵みをともに受け継ぐために立てられている。それは地を受け継ぎ、管理することを託されている人間のなかで、さらに選び分かれたれ、聖なる祭司として執り成しの働きを託されているわたしたちキリスト者にとって重要な働きです。十戒の第5戒は「あなたの父母を敬え」です。「そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることが出来る」と教えています。命の恵みを共に受け継ぐために、土台としてのキリスト、命を与え、信仰を守り伝えてくれた父祖への感謝、そして神がこの土地に生きるために立てられた命を護るための制度への服従、そのように具体的に生きる場所を与えられていることが散らされて寄留者として生きるわたしたちの勤めであることをともに確認し、主の恵みのご支配を感謝しつつ、与えられた持ち場で執り成しの歩みに励みたく願います。

お祈りいたします。